ダンピングに於ける價格形成

手塚壽郎

一

Gaetan Pirou 教授が云つてゐるやうに、「現代のアメリカ經濟學者、少くとも Veblen の追隨者と見られ得べく、Wesley Clair Mitchell の周圍を今廻ぐる大多數の經濟學者、例へば Tugwell, John Maurice Clark, Georges Soule, Sumner H. Slichter 等は、從來の經濟學原論に說かれてゐる一般的理論とこれらが種々なるモノグラヒーに現はれてゐる應用との間に驚くべき絕緣のあるのに愕然としてゐる。例へば聯邦準備銀行組織や產業の分布や關稅制度を論じたるモノグラヒーのうちに、其著者がかつて Carver や Taussig の敎室で敎へられた價値に關する果しない抽象的吟味の何ものが殘つてゐるだらうか。殆んど何一つ殘つてゐないと云つてよい。事實に接すれば、此らの推論 ratiocinations は煙となつて飛び去つて仕舞ふ。」(註) かゝる事情の下には、何物と雖、今更 Seligman や Taussig に聽くべき必要はないかも知れない。けれども、ダンピングに於ける價格形成に就いて、

此ら二者宿が極端に背反した所説を大膽に表明した人々であることは、否定せらるべくもない。私は先づ二者宿の所論を引用して、私の問題の所在を明らかにする。

（註） G. Pirou, L'utilité marginale, p. 244.

Seligman の所説は Principles of Economics, pp. 254—5 (Tenth Edition) に見ることが出來る。「一事業が商品の一種類以上を生産する場合には、副生産物と同様の物がある。現代の企業に於ける最も困難なる事の一つは、生産者が其生産物の各單位又は各種類に對して、結合生産費中の其當該部分を割當てることである。鐵道經費の場合には、此困難は最大に達する。かゝる場合には、個々の生産物の價格は其れ自身の生産費とは殆んど無關係である。たゞ生産物一切の價格が結合生産費によりて決定される。鐵道は、同一の價額の石炭が同一價額の生糸より遙かに多くの生産費を要するに拘らず、後者に多くの運賃を課す。價格は、こゝでは、生産費又は用役の生産費によつて決定せらるゝに非ずして、用役の價値によつて決定される。生糸の價値は石炭の價値より甚だ大であり、從つて高い費用を負擔することが出來る。石炭と生糸に對して同一の賃率が課せらるゝならば、石炭にとりては賃率は prohibitive となり、石炭は少しも運搬せられないであらう。而して石炭の賃率が單なる牽引費用より高ければ、生糸の賃率は、然らざる場合より低いであらう。用役の價値の原則は限界利用原則の他の表現に過ぎずして、それは、生産費それ自體が價値の最終の規定者に非ることを示してゐる。それと同様に、國内生産者が、生産過剰部分を外國に向つて國内に於てより低廉なる價格を以てダンピングによ

り規則的に處分するときに、外國の價格が低廉にせられても、國內價格が exorbitant となるとは限らない。低廉な價格を以て繼續的に外國に賣るは、工場を運轉せしむる主たる方法であり得べく、從つて國內價格は、國內部分に對して生產の全費用を課する場合より低廉な價格となり得よう。生產費は益々結合生產費を意味することゝなり、與へられたる生產物の價格は箇々の生產費とは遠い關係をもつのみである。」此叙述は望ましき netteté を以てなされてゐないとは云へ、ダンピングの價格形成を結合生產に於ける價格形成と見る見解を含んでゐるのは確かである。

Taussig は、Seligman の此見解を豫想しつゝ、ダンピングの價格形成の性質が結合生產に於けるそれに非ることを明らかにする。「甚だ大なる固定資本が唯一の目的にではなく種々なる目的に用ひらるゝ場合には、結合生產費の原則の作用が現はれる。此例の最も著しいものは鐵道賃率の制定に見られる。大なる固定設備が同一性質の財を生產するに用ひらるゝ所では、結合生產費の特色ある效果は、勿論、現はれ得ない。もしかゝる固定設備が獨占又は獨占に準ずるものであれば、同一の一生產物の諸部分が夫々異れる價格に賣られる場合があり得よう。即ちダンピングがあり得よう。然し此ダンピングは、結合生產費下の價格現象とは著しく異れる現象である。」(註一)「獨占によりて諸の買手に異れる價格を課し得る可能こそが、ダンピングなる現象の說明となる。獨占が無ければ、即ち生產者が自由に競爭してゐるとすれば、何れの買手も同じ價格にて商品を得よう。生產者は供給の一部を低廉に、殘りの部分を高く賣りて、全體として利益が得られる。市場の條件が不利

益であつて、全供給が有利なる條件で販賣し得られないときには、かやうな策略に依るべき强い誘惑を感ずる。然し何れの生産者も他の生産者の利益のために自らを犧牲にせぬであらう。他の者に利益を得せしむるために、自己のストツクの一部又は全部を廉賣せぬであらう。だがもし總ての生産者が自らの供給の一定部分を犧牲とすべき協定をなせば、目的を達することが出來る。これに對しては、一の障碍があり得る。即ち低廉なる價格にての買手が、高い價格を强いられてゐる人々に賣り戻し得べき可能性がある。然し低廉なる價格にての買手が外國人であり、輸入に對する高率關稅があつて、ダンピングされた商品を國內市場に逆送することが妨げられてゐる場合には、此障碍は取り除かれる。國內價格は高く維持せられ、此源泉からの利益は、外國へのダンピングによりて生ずる損失を償つて餘りある。特に、需要の彈力性が小であつて、國內市場に於ける供給增加が價格を著しく下落せしむるが如き商品に於て、然りである。」(註二) Taussig によれば、ダンピングに於ける價格は、販路の一部が獨占であり、他の部分が自由競爭の支配を受けてゐて、一種の Discriminating Monopoly 下に於ける價格である。

(註一) Taussig, Principles of Economics, Vol. I, p. 221.

(註二) Ibid., pp. 211—2.

こゝでの私の問題は、ダンピングに於ける價格形成が、Seligman の云ふが如く結合生産物のそれであるのか、それとも Taussig の云ふが如く差別獨占 Garelli の所謂獨占下の "Il valore molteplice" であるのかを見極

めようとするにある。然し此問題はダンピングのあらゆる場合に提起され得べきものではない。或種類のダンピングは價格形成の理論的研究の限界外にある。私は先づ、此問題が提起せられ得べき限界のうちにあるダンピングの概念を明らかにしなければならぬ。次いで結合生産の概念と差別獨占の概念を明瞭にし、此らを以て、問題に對する解答を導き出したいと思ふ。

二

ダンピングなる言葉は今や世界の各國語に其まゝ取入れられてゐるが、其流行は一九〇三、四年頃英國に於て關稅問題が朝野の論議の中心をなした頃に始まる。(註一) 其語源に就いては、數年前佛蘭西學界に於て、細密なる詮索が試みられた。J. Bainville によれば、ダンピングは英語の dump から來てゐるのであり、dump は tristesse, mélancolie を意味してゐる。外國の競爭者によりてなさるゝ投賣的廉價なる輸入のために、國內の生産者が感ずる所の悲哀の大なるに由りて、外國への投賣的輸出をダンピングと呼ぶに至つたと云ふ。また J. Ramas の詮索によれば、Dumping は英語の dope から來れる語である。dope は、競馬に際して出場の馬に興奮劑を與へて、それを刺激することを意味するのであるが、同樣に、投賣は輸出を刺激する故を以て、Dopping と呼ばれ、轉じて Dumping と呼ばるゝに至つたと云ふ。又或學者によれば、dump は、礦山に於て採掘し、トロツコにて搬出された礦石を所定の場所に空けることを意味し、ダンピングは此語から來てゐる。ダンピン

グは外國に商品を打ち散くことを意味するからであると云ふ。(註二)

(註一) J. Viner, Dumping: A Problem in International Trade, p. 1.

(註二) B. Eliacheff, Le dumping soviétique, p. 2.

此らの語源の詮索の何れが眞であるか、Domergue は此問題は英語學が寧ろ答へ得ないものであると云つてゐる。(註) 私もまた此らの何れが眞であるかを知らない。此語が意味する所の內容こそ私の當面の問題には重要である。

(註) Eliacheff, op. cit., p. 2.

一九二二年の國際聯盟經濟委員會報告書に於て、Pirelli と Nota とは、次の三條件が具備せられる場合にのみダンピングがあるとしてゐる。

一、外國の價格より低廉なる價格にて、此外國に商品を賣ること。

二、輸出國の價格より低い價格にて外國に商品を賣ること。

三、輸出國の生產費以下の價格にて、即ち損失を蒙りつゝ外國に商品を賣ること。

此定義は可成り嚴密であり、僅少の場合を例外とすれば、殆んど總ての場合に通ずる可成り包括的なる定義である。

之に反し、T. E. Gregory は loose な定義をとり、普通の用語にては、ダンピングが次の四つの場合の何れ

かを意味してゐると云つてゐる。

1. Sale at prices below foreign market prices.
2. Sale at prices with which foreign competitors cannot cope.
3. Sale at prices abroad which are lower than current home prices.
4. Sale at prices unremunerative to the sellers. （註一）

だが此らの各がダンピングであると云ふは適當ではない。輸入國の市場價格以下の價格にて此國に賣ることは、必ずしも déloyal な販賣であるとは限らない。又外國の生産者が競爭し得ないやうな價格にて此國に販賣をなすことも、また déloyal な販賣ではない。また國内價格以下に外國に輸出することもダンピングの證據とはならない。外國への輸出量が大であるため、其支拂條件の有利なため、商品引渡しの期限が遠いため、外國への輸出價格が低廉であり得る場合がある。或ひはまた、外國市場の生産條件の改良によりて生じた價格下落に、與へられた市場に於て、追隨しなければならぬ場合にも同樣である。此らの場合は何れもダンピングではなくして、concurrence loyale である。（註二）それどころか、これと反對な場合にさへ、ダンピングがあり得る。「國内價格と外國に行はるゝ價格の等しきこと、否、前者が後者より低廉であることさへも、ダンピングが存在しない證據にはならない。生産費以下で、即ち損失して外國に賣る産業は、明らかにダンピングをしてゐる。けだし此場合は、經濟要素の通常の働きによつて說明し得ない pratique であるからである。ところが、此産業

は、同時に、自國内の市場に於て同様の方法に出づることが出來る。かゝる假定がなし得るとすれば、國内價格と外國價格の等しいことは、ダンピングの存在を否定するものではない。」(註三) 尚又、或産業が人爲的に作られたる特種なる地位を利用して、外國市場に於てより高い價格ではあるが、正常的狀態が justify する價格以下に、外國に賣る場合がある。此場合にもダンピングがあるのは明らかである。

(註一) T. E. Gregory, Tariffs: A Study in Method, p. 177.

(註二) Néron, La lutte contre le dumping, dans la Revue politique et parlementaire, fevrier 1933, pp. 244—5.

(註三) Ibid., p. 245.

夫れ故にダンピングが成立するためには、Gregory が指摘したやうな四つの場合の一々があつたのでは足りない、それらが總て同時にあらねばならない。だが此ら四つの場合が總て同時に現はれてゐないにしても、ダンピングがある場合もある。Viner は此らの二つの場合を擧げてゐる。(註一)

一、或特種の商品にして、國内市場が絶無であるか又は狹小であり、外國市場の買手の間にのみ重要なる價格差別が行はるゝ場合

二、賣手の國内市場がダンピングの行はるゝ所 (Dumping-ground) となり、外國市場の買手に高い價格が課せらるゝ場合

例へば英國に於いて、下級の綿布が製造せられても、それらは東洋に需要せらるゝのみで、本國に需要せられ

ない。而して英國の綿布業者は此らの低級品を印度にて高價に販賣し、支那に廉賣したことがあつた。此場合には英國の生産者は支那に於てダンピングを行つたわけではあるが、國内價格と支那への輸出價格の比較は不可能である。(註二)　また第二の例として、かつてベルギーが、自國内に多くの販路を有せざる板ガラスを英米に一〇乃至三〇%高價に販賣してゐた事實があるが、これまたダンピングである。「ダンピングが行はるゝ場合に、Dumping-Ground として用ひらるゝは遠隔の市場であり、高い價格を課せらるゝは近距離の市場殊に國内市場であることは、一般に認容されてゐる。これは疑も無く一般的原則である。けれども之に對する重要なる例外もある。國内市場が遠隔の市場に比較し重要ならず、生産が此遠隔の地方への輸出を主たる目的として行はるゝ場合には、"Reverse dumping" と稱せらるゝものが生じ得る。即ち外國の買手に對し國内の買手に對してよりもより高い價格を課し得る場合が生じ得る。(註三)

(註一、二)　Viner, op. cit., p. 5.

(註三)　Ibid., pp. 5—6.

此らの理由によつて、Viner は其著述 Dumping に於ては、ダンピングをば、"Price-discrimination between national markets" (註一) と定義してゐる。一九二六年國際聯盟に提出した報告書に於ては、此らの例外的なる場合を考ふることなく、Viner は、「ダンピングなる表現は、正確を期してゐる學者が與へた意味に於ては、外國に商品を輸出するに當り、同じ時に、同じ事情の下に國内の消費者に課せらるゝ以下の價格にてなすことを意味

する」と定義してゐる。(註二) 而して Viner は、「外國に生産費以下に賣る」、「外國人が競爭出來ない價格」と云ふ條件を重要視してゐない。「或ダンピング價格が生産費、ダンパーの利潤、競爭賣手の價格等に對する關係は屢々複雜な問題であつて、單なる定義によつて解くことも出來ず、多くの場合正確なる解決の與へ得られない問題である。後に示すやうに、ダンピングには種々なるタイプと種類とがあつて、實際上は困難を伴ふとは雖、論理的には、ダンパーに利益を齎らさないダンピングと、利益を齎らすダンピングとを區別することが出來、また競爭相手の價格よりも低いダンピング價格と、然らざるダンピング價格とを區別することが出來る。」(註三)

(註一) Viner, Dumping, p. 3.

(註二) Cité par Eliacheff dans le Dumping soviétique, p. 8.

(註三) Viner, Dumping, p. 4.

普通に爲替ダンピング Exchange Dumping と稱せらるゝものは、其效果に於て、右に定義せられたダンピングと相似たるものがあるが、其本質に於ては著しく異る。「輸出國の通貨の急激なる下落に由り、外國貨幣にて表はされた異常に低廉な價格にて行はるゝ商品の輸出に、爲替ダンピングなる言葉を用ふるのが普通になつて來た。然しこれは、本來のダンピングとは全く異る事實である。それには、理論的にも實際的にも問題があり、重要にして甚だ困難な問題がある。それは、多くの點に於て、輸入國に對しては本來のダンピングと同樣

の效果をもつてゐる。然し通貨が下落せる國に於ける輸出者が、國内の買手と外國の買手との間に販賣價格をdiscriminateしない限りに於ては、本來のダンピングはあり得ない。」(註一)のみならず、本來のダンピングは、Viner の云ふが如く、次の如き場合にしか行はれ易くはない。

一、輸出の産業がトラスト又はサンヂカーの形式の下に構成されてゐる場合

二、當の産業が生産又は輸出を目的として統一的組織に構成されてはゐないが、他の一二の重要なる企業に從屬し、此ら重要なる企業は全生産の大部分を供給し、前者が國内價格より低い價格にて輸出する商品を引受けて生ずる損害の大部分を負擔し得る場合

三、商品が諸生産者の間で標本化されず、各生産者が商標、特種なる形式、特種なる表示方法等により個別化され、從つて價格競爭の作用を一部分逃れ得る場合

四、輸出の奬勵金が、當該産業の團體とは別な組織例へば國家、又はダンパーにより生産物に變化さるゝ原料を供給する團體によりて與へらるゝ場合(註二)

(註一) Viner, op. cit., pp. 15－6.

(註二) Eliacheff, op. cit., pp. 8—9.

かやうに概念を規定されたダンピングは、Viner によれば、其動機と其永續性の存否の觀點から、次の如く分類せられる。(註)

Motive	Continuity
A. To dispose of a casual overstock	Sporadic
B. Unintentional	
C. To maintain connections in a market in which prices are on remaining considerations unacceptable	Short-run or intermittent
D. To develop trade connections and buyers' goodwill in a new market	
E. To eliminate competition in the market dumped on	
F. To forestal the developement of competition in the market dumped on	
G. To retaliate against dumping in the reverse direction	
H. To maintain full production from existing plant facilities without cutting domestic prices	Long-run or continuous
I. To obtain the economies of large-scale production without cutting domestic prices	
J. On purely mercantilistic grounds	

（註） Viner, Dumping, p. 23.

私のこゝでの目的は、先に述べしが如く、ダンピングに於ける價格形成を論じようとするにある。だが Allievi

が云ふが如く、ダンピングが全く動學的 intrinsecamente dinamico 現象(註一)であるとすれば、そこには其價格形成理論を構成し得る餘地がなからう。少くとも、Viner の分類に於ける Sporadic 及び Short-run or intermittent ダンピングは動學的現象であり、此意味に於て此らのダンピングには、價格形成の理論はあり得ない。Döblin も云つてゐる。「常住的持續的ダンピングのみが、價格形成の觀點から興味あるものである。Sporadisches Dumping には、價格の理論的問題はあり得ない。賣り殘りや偶然の生產餘剩が一たび外國に向つて投賣りせらるゝときには、此ダンピングの後に於ける國內價格は以前より高きものとなる。これだけが Sporadisches Dumping の理論の最後の語である。また侵略を目的とするダンピング (Eroberungs dumping) に就いても云ひ得べきものは多くはない。けだし此ダンピングに於ても、價格決定の合理的モメントは後方に退いてゐるからである。たゞ、輸出價格が下り得る限界は、Zusatzkosten が償はるゝ所にさへもないと云ひ得るだけである。」(註二)

(註一) Lorenzo Allievi, Spunti polemici di attualità, p. 26.

(註二) E. Döblin, Theorie des Dumpings, p. 51.

こゝまで來て私の問題は漸く明瞭になつた。それは、Long-run or Continuous Dumping 特に、國內價格を低下せしむることなく、大量生產の利益を得ようとするもの、及び國內價格を低下せしむることなく、現存の大生產機關を最高限度まで利用するものに於ける價格形成を明らかにするにある。ところで此問題に就いて今ま

で學者が與へてくれた解答は、此價格形成を結合生産物のそれであるとするものと、差別的獨占のそれとするものとの二つを出でない。

III

先に引用して置いたやうに、ダンピングの價格形成を結合生産物のそれであるとなす代表的學者は Seligman である。私はこゝに重ねて同一の引用をなすことを止めて、直ちに其吟味に入るのであるが、其ために結合生産の概念を明瞭にしなければならぬ。(註)

(註) セリグマンの同樣の所說は、M. Byé によれば (Les lois des rendements non proportionnels, p. 376 en note.)、タウシッグとの論爭のうちにも (Quarterly Journal of Economics, Vol. XXI, pp. 156—7.) 現はれてゐると云ふ。手元に無かつたゝめ、これを參照することが出來なかつた。

結合生産 production à coût joints 及び結合生産物なる概念は、既にクルノーに現はれ、次いでミル、Jevons, Sidgwick, Marshall 等に見られるのであつたが、それらが精密になつて來たのは、タウシッグの論文 A Contribution to the Theory of Railway Rates (Quarterly Journal of Economics, 1896, pp. 438—465, reproduced in Railway Problems by W. Z. Ripley, ed. 1907, pp. 123—144.) に端を發したるタウシッグ對ピグーの論爭によつてゞある。だが結合生産や結合生産物が何を意味するやに就ては、今も尙、學者の見解が一定してゐない。其らの內

容は、Marco Fanno の表現を借りるならば、(註) 二つの極端なる概念——廣いものと狹いものとの——の間を動いてゐるのである。

(註) Marco Fanno, Contributo alla teoria dell' offerta a costi congiunti. Giornale degli economisti, 1914, Supplemento, ottobre, p. 15.

結合生産、結合生産物と云ふ以上、異質の二つ以上の財が生産せられねばならぬのは勿論であるが、如何なる場合に生産物が異れるものと見らるゝのであるか。例へば同じ列車によつて棉花や生糸や銅や石炭が輸送せられた場合に、此鐵道運送は等質と考へらるべきであらうか。タウシツグは等質に非ずと答へ、ピグーは等質なりと答へ、セリグマンはまた少しく異れる見解を採る。たゞ大體に於ては、セリグマンとピグーとは同様の立場をとるが如くである。

セリグマンによれば、「生糸、綿布等を異れる賃率のもとに分類するてふ單純なる事實を以て、技術的に相異れる商品の生産と見るは、明らかな誤である。行はれた支拂は生糸や綿布の運送費とは何らの關係をもたない。それは運送なる用役と關係があるのである。而して果されたる用役は技術的に同一である。」

ピグーによれば、「或運送能力が銅の商人に、また或運送能力が石炭の商人に賣られたと云ふ事實は、二つの異れる用役がなされたことを意味しない。二つの異れる概念が此ことに就いてあるのは、銅の運送、石炭の運送と云ひて、銅の商人、石炭の商人に賣られたと云はないから來るのである。」(註)

（註）Pigou, Wealth and Welfare, p. 216 ; Economics of Welfare, 3rd edition, p. 297.

かくてセリグマンにとりても、ピグーにとりても、右の例にありては用役の異質性はないのである。然しピグーにとりては、此技術的異質性の缺欠は等質に等しいのであるが、セリグマンにとりてはさうではない。セリグマンによれば、技術的異質性のほかに經濟的異質性なるものがある。「異れる條件の下に市場に達する所の同一商品の各は、經濟的に云へば、結合生産費の原則に從ふ。此差異を作るものは、需要の種々なることである。而して價格の異るだけ種々なる獨立なる需要がある。」（註）だからセリグマンによれば、ダンピングの場合にも、生産者の側から見れば、結合生産物があるのである。國内に賣らるゝ商品と、ダンピングによりて國外に賣らるゝ商品とは、經濟的には同一ではないと考へられてゐる。

（註）Cité par M. Byé dans Les lois des rendements non proportionnels, p. 376.

ピグーは此結論を承認しない。「或綿布が或買手に賣られ、同じ種類の綿布が他の買手に賣られたからと云つて、二つの異れる商品が生産せられたとは考へ得られない。」同樣にピグーは、異れる二商品の運送は「需要の條件の異れるものに關する」點では同一ではないが、然しこれあるがために、二商品の運送が異れる用役であると、セリグマンの如くには考へない。需要條件の異れる用役はピグーに從へば、生産費が common であるところの生産物に過ぎない。（註）

（註）Pigou, Raiway Rates and Joint Costs, in the Quart. Journal of Economics, Vol. XXVII, 1913, p. 691.

けれどもピグーの概念も絶對的ではない。例へば二つの異れる時に於てなさるゝ同一技術の二用役は異質的なるものと考へられ、結合生産費の上に生産せらるゝ結合生産物と考へられてゐる。特にピグーは此時間的相異によりて需要の相異があるとき、此異質性を認めようとする。"The concept of joint supply can, if desired, be applied to the same services rendered at different times by the same fixed plant. Thus the services of railways for night travelling and day travelling may be called joint, and different rates advocated on that ground. This consideration is especially important with electricity rates. It justifies differentiation of a form designed to carry off nearly equal supplies throughout the day or year. The same result can be obtained on a different route if we regard the services supplied at the two times as being the same services but subject to varing demands" (註)

(註) Pigou, Economics of Welfare, 3rd edition, p. 300 en note.

次に右の如き異質性によりて區別せらるゝ二つ以上の生産物は、如何なる場合に結合生産物となるのであるか。狹い定義をとるピグーによれば、生産の唯一の過程に於て一商品の生産增加が他の商品の生産の同時的增加なくして行はれないやうな場合に結合生産物がある。廣い定義をとるタウシツグによれば、諸生産物が同一の生産過程によつて得らるゝときは、それが必然的のものであらうと、否とを問ふことなく、結合生産物があるのである。

——Pigou, Wealth and Welfare, p. 215; Economics of Welfare, p. 298.——

"Two products are supplied jointly when a unit of investment expended upon increasing the normal output of one, necessarily increases that of the other also."

——Taussig, Principles of Economics, Vol. I, p. 221.——

"Whenever a very large fixed capital is used not for a single purpose, but for varied purposes, the influence of the principle of joint cost shows itself……"

さればピグーの概念に於ては、生産物の間に、例へば瓦斯とコークス、棉花と棉種との間に見るが如き自然的必然的關係がなければならない。タウシツグのそれに於ては、必然的關係は自然的なるを要せず、經濟的必要であつてよいのである。例へば企業の縱斷的合同により、鐵線が鐵板、鐵管と併せ生産せらるゝが如きである。

ピグーの狹い概念はまたFannoのそれでもある。「結合生産の概念の此行過ぎた(soverchia)擴張は自分には正しいとは思はれないし、科學的に正確であるとも思はれない。或分類によつて區別された現象の夫々の集團は、科學的價値と重要さをもち得るためには、形式的等質であるのみならず、實質的にもまた等質でなければならぬ。然るにこれは、上に引用した意味の結合生産費供給の集團の場合からは甚だ遠い。げに結合してしか生産し得ないが故に、多種類の財又は用役が結合して生産せらるゝのと、便宜的又は經濟的なる偶然的理由によつて結合して行はるゝ生産とは全く異れるものである。」(註一)けれども此ら二つの概念は、ピグーやFanno

が考ふるが如く、相反したものではなく、Edgeworth が考ふるが如く、(註二) 二つの定義の間には本質的なる背反はないのである。げに自然的結合生産物と云はるゝ例のうちにも、市場の新なる必要によつてしか結合生産物となり得ないものがある。例へば、J. M. Clark が云つたやうに、「綿糸と共に生産せらるゝ棉種はかつて無用なる物としか考へられなかつた。然るに、之に對する需要が生じてからは、それは副生産物として結合生産物の一つとなつた。」(註三)

(註一) Fanno, Contributo alla teoria dell' offerta a costi congiunti, Supplemento al Giornale degli economisti, ottobre 1914, p. 16.

(註二) Edgeworth, Papers relating to Political Economy, Vol. II, p. 440.

(註三) Cité par Byé dans Les lois des rendements non proportionnels, p. 380.

一般には、極めて少數の例外を除けば、生産物の自然的必然的結合は殆んどあり得ない。多少必然的に結合し、經濟的條件によりて或ひは此結合を絶たれ、或ひは此結合を持續する生産物があるのみである。Arias の見解もほゞ同様である。「生産費の偶然的、一時的結合は、其常住的、不可分なる、必然的結合と混同すべきではないと云はれる。だが、物理的必然性によりて生産費が結合してゐるのは、便宜上の必要によりての結合と形式上類似するだけであつて、本質上相異れるものだと云ふは、眞ではない。生産費結合の現象は、こゝでは、其經濟的結果に關して考へられてゐる。即ち企業者の便宜上生ずべき規準を立つるべく考へられてゐるの

である。二者何れの場合にも、生産費結合の現象が此目的に出てゐるとすれば、結合が常住的であらうと一時的であらうと、必然的であらうと任意的であらうと、同じ集團の下に集め得る此ら二つの供給を區別すべき如何なる理由もあり得ない。」(註一) ピグー自らも、自然的必然的なる條件を半ば撤去せるが如き結果を示してゐる。即ち先に云つたやうに、ピグーは、時間的に異れる技術的に同一なる種類の用役を結合生産物と見てゐる。だが時間的に異れる技術的に同一種類なる用役は、必然的に結合してゐるとは云ひ得ないのである。例へばピグーが示した例に於て、電力を日中のみ供給することも出來れば、夜間のみ供給することも出來るのであつて、此ら二つの供給は必然的に結合してゐるのではない。經濟的便宜のために、此らは結合せしめられてゐるのである。またピグーは、往復運送の場合に於ける歸路を往路の結合生産物であると見てゐる。"It should be clearly recognised that, in the services rendered by railway compagnies, joint supply does play some part. This is conspicuously true as between transportation from A to B and transportation in the reverse direction from B to A. The organisation of a railway, like that of a steamship company, requires that vehicles running from A to B shall subsequently return from B to A. The addition of a million pounds to the expenditure on moving vehicles necessarily increases both the number of mouvements of vehicles from A to B and number of mouvements from B to A."(註二) だがタウシッグが指摘せるが如く、此往路と歸路との間には自然的必然的關係はないのである。歸路に空車を運び戻さねばならぬことは、往路と必然的に結合してゐる。然し歸路に旅客や貨物を運搬して來ねばなら

ぬと云ふ技術的必然性は少しもない。(註三) Haney が云ふ所も同様である。"Here [In railways], there is no physical necessity as in the mutton-wool case. True, it might be argued that the case of back-hauls is of this sort, and this is probably why Professor Pigou recognizes the back-haul as a case of joint expense. But this is another illustration of confusing physical performance with economic service; for it is cars that have to be hauled back, not freight, and the railway could keep on making up trains at B merely to get its equipment back to a sole source of traffic at A." (註四)

(註一) Gino Arias, Principii di economia commerciale, p. 823.

(註二) Pigou, Economics of Welfare, 3rd edition, p. 300.

(註三) Taussig, Railway Rates and Joint Costs, in the Quant. Journal of Economics, 1913, p. 694.

(註四) L. H. Haney, Joint Costs with Especial Regard to Railways, iu the Quart. Journal of Economics, 1916, p. 241.

そこで、Haney の如きは、結合の必然的關係に第一次的必然關係と第二次的必然關係を認め、此らは何れも共に、結合生産の關係を成すに充分であると認めてゐる。「必然性の觀念は一見明瞭に見えるものゝ一つであるが、事實に於ては、明瞭を著しく缺く所の概念である。必然性は物理的であることもあらうし、又は經濟的であることもあらう。物理的必然性の場合は、羊毛と羊肉とのクラシックな例によつてよく例示される。我々は羊毛を成長せしむることなしに、羊肉を生産することが出來ない。こゝでの問題は、必然的に生ずる副生産物

から、或用途なり、利益なりを引出すことにある。云はゞ、それは現在存する機械に未だ用ひられてゐない能力があるが如くである。未だ用ひられてゐない部分は別なitemである。此場合は第一次的結合(Primary Jointness)と呼ばれ得よう。なぜなら此費用は先づ第一にJointであるからである。第二次的結合(Secondary Jointness)によつて筆者が意味する所は、利潤の條件として必要なる結合(common)生産を意味する。要するに、これこそが眞の經濟的結合費用である。此結合に於ける生産物は、他方の生産物を生産することなく生産し得るけれども、之を別に生産しようとすれば、損失をしのばねばならない。例へばunderstocked storeを採つて見る。其地域の可能々力を基礎として計算された地代が全收入を食ひ盡して、利潤をあぐるには新線を開かねばならない。こゝでの問題は、物理的に必然的に結合せる副産物を得ることではなくして、經濟的に必要な費用を償ふべき副産物を得ることである。それは第一次的結合の如く、unused capacityの場合ではなく、unused oportunityの場合である。こゝで費用が結合してゐるのは、Side lineが、此事業を自由競爭下に存在せしめて行くためには、運轉せられなければならぬからである。」(註)

(註) L. H. Haney, Joint Costs with Especial Regard to Railways, Quart. Journal of Economics, Vol. XXX, 1916, pp. 239—240.

要するに、ピグーが自ら意識して採る所の概念は狹きに失する。中間的概念をとるJ. M. Clarkに於てさへ、多種類の財が結合生産費の下に生産せらるゝには、それが經濟的必要によりて結合さるゝを以て足るので

ある。"True Joint Cost occurs where efficiency varies according to the proportion of different products turned out from one central process and where it is cheaper to turn them out together than separately." 而して此結合には二つのタイプがある。一は、諸生産物の得らるゝ割合を、經濟的必要によりて、變化し得るものであり、他は、生産物の一部を廢棄することによつてしか、此割合を變化し得ないものである。"There are two main types or stages of joint cost, in one of which the proportions are adjustable, as for example, adopting different kinds of crop rotations, or different breeds of sheep, some of which are better for wool while some are better for mutton. In other type, the proportions cannot be adjusted except by leaving some useful material to go to waste, as for example, the proportion of hides to beef after the steer has been slaughtered." (註一) またセリグマンの如く、同一の物理的性質を有する財のみしか存在しないのにも拘らず、需要の性質と程度とが異る——勿論異れる價格を生ぜしむるが如くに異るとの意味である——場合には結合生産費下の多種類の財があると見る概念は廣きに過ぎる。鐵道運送が異れる財を輸送する場合には、同一の用役が提供せられてゐるのではない。石炭の輸送は多大の動力やスペースを要するに反し、生糸の輸送は少量の動力とスペースを要するに過ぎないのであつて、此らの運送は同一の性質の用役の提供であると見らるべきではない。從つてセリグマンの廣い概念はこゝには其缺點を現はしてはゐない。然るにセリグマンは、Leduc の所謂 "la différenciation, conséquence d'une modification, au moins apparente, dans la qualité du bien monopolisé" (註二) によつて行はるゝ Discriminating Monopoly を結合

生産と見、進んで單純なるDiscriminating Monopolyをも此生産と見るに及んで、結合生産の概念を此らの獨占にまで擴張し、此らの獨占の本質を見誤ると同時に、結合生産の本質を見誤るに至つたのである。"To the extent that supply depends on cost, we have the law of joint cost. In many cases different parts of the same commodity serve different uses and therefore sell at different prices: the staterooms in a steamer, the seats in a theatre, the various portions of an animal used for food, appeal to different classes, and thus sell at varying prices. The normal price does not adjust itself to the cost of the particular part, because there is no such separate cost. It is the whole, not the parts, to which we can assign a cost; and this cost is the joint cost." (註三)

(註一) J. M. Clark, The Economics of Overhead Costs, p. 98.

(註二) Leduc, La théorie des prix de monopole, p. 193.

(註三) Seligman, Principles of Economics, pp. 253—4.

セリグマンがダンピングに於ける價格形成を結合生産のそれと見るに至つたのも、結合生産の此誤つた概念規定から來てゐる。同一種類の商品が國内に於て高價に販賣せられ、外國に安く賣られてゐるにも拘らず、二つの强度と種類の異れる二需要を含むとの理由の下に、二種類の商品が生産せられてゐると見るセリグマンの論理は、勿論徹底してゐる。然しダンピングに於ては、價格形成の一形態としての結合生産の條件となつてゐる二種類の財が生産せられてゐるのではない。需要の强度と種類とにより、同一の商品でありながら、異れる

價格をもつべき價格形成の形態は、Discriminating Monopoly である。セリグマンの如く、財に對する需要の强度と種類とのみから、財の種類の存在を考ふれば、價格形成の異れる形態を、同一の形態となさねばならぬことゝなるのである。

進んで價格形成の形態の內容に入つて見ても、結合生產とダンピングの間に著しい差異を見ることが出來る。結合生產は、一生產行程に於て二つ以上の種類の財が生產せらるゝがために、一生產行程中に費された生產費の如何なる部分が、此らの財の或ものに、他の如何なる部分が他の或ものに必要とせられたかの判斷が下し難き場合である。今或一生產行程から二つの結合生產物A、Bが生產せられるとする。平衡價格の成立は次の條件によつて示される。此生產行程によつて得られるA財の量をxとし、B財の量をyとする。$f(x)$をAの量の函數としてのAの價格を示すものとし、$\varphi(y)$をBの量の函數としてのBの價格を示すものとする。Kは一生產行程單位から生ずるAとBとの量的比例であり、$F(x+y)$は一生產行程の單位數の函數としての一單位の限界生產費、即ち一生產行程中の限界單位から生ずるAとBの生產費合計であるとする。然るとき、平衡價格は次の方程式システムによつて定められる。(註)

$$\begin{cases} \dfrac{x}{x+y}f(x)+\dfrac{y}{x+y}\varphi(y)=F(x+y) \\ \dfrac{x}{y}=K \end{cases}$$

而して此ら二方程式を含むシステムに於て、未知數はxとyとの二個であるから、此聯立方程式は解けるのであつて、二財の夫々の價格は決定する。かやうな價格形成が行はれるのは、A、B夫々の生産費が幾何であるかの判斷が下し難いからである。一生産行程に於ける限界行程單位の生産費即ち限界生産費が、其行程單位から生産せられる夫々の財の需要價格に等しきときに、夫々の價格が決定すると云ふ意味は、夫々の結合生産物の生産費が限界生産費中に於てどれだけを占めてゐるかゞ不明であるから、限界生産費のうちの負擔し得るだけの部分を夫々の結合生産物に割り當てると云ふことにある。夫々の結合生産物の生産費の計算が正確になされてゐるのではない。之に反し、ダンピングにありては、生産さるゝ財は物理的には全く同一のものであつて、一々の生産費の計算は可能である。國内に於てと、國外に於てと、異れる價格が定められても、それは夫々の財單位が其生産費を知られてゐないからではない。それは、一に全く收益を出來るだけ多からしむるがためである。從つて價格の決定に、限界生産費の作用も現はるゝことが出來ない。

(註) Marco Fanno, Contributo alla teoria dell' offerta a costi congiunti, Supplemento al Giornale degli economisti, ottobre 1914, p. 28.

四

ダンピングに於ける價格形成が結合生産に於けるそれであると信ずる人は、さまで多くはない。多くの學者

は、それを準獨占に於ける差別獨占のそれであると見る。

獨占が純粹なる形態をとる場合は甚だ稀であつて、多くは準獨占の形態をとるものである。ダンピングも純粹獨占の下に行はるゝは勿論であるが、準獨占の主要形態たるカルテル、トラストの下に行はれるのが普通である。此らの準獨占の形態の下に行はるゝ差別價格は、Pesl が指摘してゐるやうに、三つの形式をとることが出來る。

1. Preisveränderungen nach Klassen der Käufer (persönliche Veränderungen)
2. Preisveränderungen nach Handelszonen innerhalb eines Landes (örtliche Veränderungen)
3. Preisveränderungen bei Verkauf nach verschiedenen Ländern (internationale Veränderungen)

然しまたレオン・ワルラスが例示して得るように、諸々の時間によつても、價格を差別することが出來る。(註一)ダンピングは此第三の形式である。(註二)

(註一) L. Walras, Eléments d'économie politique pure, éd. 1926, p. 444.

(註二) L. Dan. Pesl, Das Dumping: Preisunterbietungen im Welthandel, p. 39.

差別價格はワルラスが指摘してゐるやうに、自由競爭の下に於てもあり得るであらうが、獨占の下に現はれ易い。だがそれらは獨占下に無條件に現はれ得るのではない。最も正確に其條件を擧げてゐる Leduc やピグーが云ふが如く、其商品の各單位に對する需要價格が、他の單位の販賣價格と獨立でなければならぬ。このこと

は、任意の一單位が他の單位に代り得てはならぬことを意味する。これはまた、(一)一市場に於て得らるゝ商品の各單位は他の市場に移轉され得てはならぬ、(二)一市場にある需要單位が他の市場に移され得てはならぬことを含んでゐる。(註一) 商品がもし獨占者によつて直接に賣られ、買手自らにより直ちに消費さるゝ用役であるならば、此らの移動は甚だ困難であり、Pesl の分類に於ける第一類の差別價格は此種類の商品に行はれ易い。又國内に於ても遠隔の地方間に於ては、此らの移轉が妨げられ易く、Pesl の第二類の差別價格が現はれ得る。だが國を異にし、一方國に高き關税障壁が設けられて、他方國からの商品の移動が困難である場合には、Pesl の第三類の差別價格が容易に現はれ得る。けれども「此商品が他方國に於ても準獨占的地位を有する場合には其 hégémonie économique を强からしむるために、ダンピングをなす必要はない。ダンピングは、他方國に於ては自由競爭に參加せねばならぬ場合にしか行はれない。」(註二)

(註一) Pigou, Economics of Welfare, 1929, pp. 275—6.

(註二) Leduc, op. cit., p. 366.

そこで、ダンピングに於ける價格は、他國に行はるゝ自由競爭に打ち勝ち得るほど低廉なものでなければならぬ。實にこれがダンピングに於ける價格の本質的條件でもある。而して今我々の問題となつてゐる差別獨占は、「最も安く生産され得る生産額を、純收入が最大となるやうに國内國外兩市場に分つを目的としてゐるのであるから、國内に於て最大收入を生むべき販賣量の如何によつて、又は需要の彈力性の如何により、生産費以

下に下らねばならぬ。ところでこれによつて生ずる損失は、國内市場にて高く賣らるゝによつて生ずる利潤をそれだけ減少することゝなる。」(註一) 然るに Leduc は、此場合に「獨占者が生産の一般的費用を償ふことの出來る disponibilités は減少し、結局、外國への販賣によつて生ずる損失は、國内市場に於て實現せらるゝ利益に超過し、此企業の生産活動を鈍くする」(註二) などゝ云つてゐる。これは、Long-run Dumping の定義に含まるゝ hypothèse によつて否定せられなければならぬ。だから Leduc 自ら他の所で云つてゐるやうに、「ダンピングは、持續的なる政策としては、外國市場に向けらるゝ部分が、少くとも其 coût special (運送費及び關税を含めて) に等しい價格にて賣らるゝときにのみ考へ得られる。」(註三)

(註一、二) Leduc, op. cit., p. 368.

(註三) Ibid., p. 372.